

折り鶴

Paper Cranes

200万年前に人類がはじめて手にした道具は、時の流れと共にめざましい進化をとげ、現代の私たちの周りには多くのモノであふれている。科学技術は飛躍的に発達し、生活はますます豊かに便利になった。しかし、私たちは本当に幸せになったのだろうか？人命や多くのモノを一瞬にして失ってしまう激甚災害や、止むことを知らぬ戦争や紛争、いじめや自殺などの深刻化した社会不安などは、今日いっそうの混迷を極めていくように思われる。

人は祈ることで希望を見つけようとする。そんな人間の根源的な行為を象徴し、結晶化したモノ、それこそが本展を締めくくる101番目のモノに相応しい

と考え、九州国立博物館では「折り鶴」を選んだ。

日本では平和や鎮魂、病氣治癒や必勝祈願にいたるまで、祈りを込めて折り紙で鶴を折る習慣がある。しかも、折り鶴は、子供からお年寄りにいたるまで祈りのかたちとして広がった、日本の文化である。未来への祈りを折り鶴に託し、無心に折る行為、そして思いが込められた折り鶴。それこそが、日本にとどまらず、人間が受け継いでいきたい未来を語るモノではないだろうか。

九州国立博物館会場では、折り鶴を作り透明で巨大な折り鶴オブジェに入れていただく参加型の展示を行なう。



折り鶴と透明の鶴オブジェ

色とりどりの折り鶴がおりなす祈りの世界は日本文化の結晶である。

山崎信一（スタジオパッション）撮影